

揖保川流域委員会現地視察時の説明

龍野橋付近

(バス車内での説明：祇園橋～龍野橋付近)

河川管理者 今揖保川の右岸を走っていますが、左のほうに見える欄干のようなものが^{たたみ}置堤でございます。昭和 25 年から 30 年にかけて作られたものです。当時洪水による被害が多く発生し、堤防を整備するということになったのですが、住民の方から川の景色が損なわれる、見えなくなるというご意見が出されまして、これらの意見に対応してこういう欄干のような堤防を作ったということでございます。欄干のところに溝が切っておりますけども、ここに畳を差し込んで洪水の時に水を防ぐということでございます。通常は畳を差しておりませんから、見通しが良いということでございます。非常に珍しいものでございまして、延長約 3 キロにわたってこういう置堤がでございます。

この堤防に使用する畳は昔の大きいサイズの畳です。今の住宅に使用するサイズではなくて、昔の本間の寸法になってます。先日、NHK の番組でも、最近畳が小さいので板を接がなければならず、訓練でもそういうやり方をしている、ということが説明されておりました。

(バスから降車して説明：龍野橋付近)

河川管理者 先ほどご説明しましたとおり、約 3 キロにわたってこういう置堤というものが龍野市・揖保川町・御津町に設置されております。その欄干のところに溝が切っており、そこに畳を差し込むというかたちで洪水時の水を防ぎます。こうすれば、平常時は堤防が低い状態で見通しが良くなります。昭和 25 年当時、住民の方の要望に沿うかたちを取ったというふうに聞いております。最近畳のサイズが小さくなっているということもありまして、防災ステーションに大きな畳を保管しているという状況でございます。

浅見委員 ここで見ていただきたいのは、一番最初に新香橋のところで説明した丸石河原についてです。カワラサイコ・カワラハハコ・カワラバッタなどが生息する空間があったけれど、最近減ってきましたという話をしました。その丸石河原が実は白い花の咲いているところの一段下の河原に広がっています。ここはすぐそこにヒガシマルの工場があって、三木露風が「樽の歌」というのを詠んでいます。歌の前後は忘れたのですが、その歌の中にカワラヨモギが咲いている河原にみんなが下りてきて醤油の樽を洗ったという一節があります。だから昔の写真を見ていると、このあたり一面に丸石河原があって草もこれほど繁ってなくて、そこで樽を洗っている人たちがたくさんいる光景が写っています。昔はそういう光景が残っており、工場があって川と関わっていた人があって、河原があるという一連の光景、人と川との関係が残っていたのがこのあたりかなと思っています。もしよろしければ、一段下の丸石のところまで下りて、石が動かない様子を見ていただきたいなと思います。

上流側にあった白い礫原、下りてゆっくりくつろぐのに便利そうな河原に比べますと、こちら

のほうが砂が詰まって1個1個が動かない様子が分かると思います。このあたりの出水の頻度、洪水で水をかぶる頻度は、上流側の河原に比べるとずっと減ってきています。年に1回か2回です。でも最近は大川の洪水調節機能とかで、どこの河川でも大きな出水がなくなってきました。そうなりますとこうやって枯れた草が冬になっても残ることになります。次の年に枯れて栄養分となる。すると、乾燥して養分もないようなところにしか生えないカワラなんかは、水分や栄養分の良い所を好む、町中にも生えるような生き物が入ってくることによって競争に負けていってしまいます。そして今度は草むらに変わっていくということがあります。

1点だけ申し上げたいことがあります。実はこのもうちょっと下、防災ステーションのところで正田さんが流し雛を10年ほど続けていらっしゃいます。そういう流し雛というの、こんな乾燥した河原のところ、水辺に近づいた時に、水がヒタヒタしているんですけど石の上のこうして乗っかれば水面のところまで出れる。それで礫のある河原でこうやって雛を流していた。そういう風習があったのではないかなと思います。

もう1点あります。実はこの、石がなかなか動かないような河原は、先ほど上流でよく見たような石ころだけの河原に比べると、水面から河原までの高さが、先ほどの礫原よりも高いところにあります。かといって、高水敷ほど高くない。頻繁に水に洗われる礫原よりも高いけれど、高水敷よりも低い中間ぐらいのところにこれだけの面積があることで「カワラ」と名前がつく生き物の生息の場となるのです。こういう中間的なところも川としてはすごく大切なんだということをここで知っていただければと思います。

5月20日現地視察時の正田委員による説明

(バスから降車して説明：龍野橋付近)

正田委員 正田でございます。このあたりは鶏籠山が見えておりまして、城下町の龍野が対岸から望められる場所でございます。先ほどご説明のありました大庄屋の堀家の大楠がこの上流に見えております。向こうからご覧いただきましてお分かりのように、クスノキもですが、屋敷林がこんもりと茂って白壁の土蔵がいくつもありまして、対岸から見ますと非常に心なごむと言うか、龍野の町に住む人間にとっては原風景みたいな、非常に親しまれている景色でございます。堀家というのは代々の大庄屋。川を隔てて、こちら側は実は天領でございました。それだけに庄屋の地位というのは非常に高かったようで、立派なお屋敷が今も残っております。ただ、先代・先々代が非常に謙虚な方で、皆さんが中を見せていただきたいとか、取材させていただきたいとかおっしゃっても、そんなものは人に見せるものと違いますと言ってあまり公開なさらなかったんです。それがかえって災いをいたしまして、もっとグレードの低いものでも国の重要文化財にしてもらっているのに、まだ指定されておられません。最近、今のご当主の方は、維持をしていくのが非常に大変なので、建物はお譲りしてもいいので公で保存してもらえないかということをおっしゃいます。しかし今度は、重要文化財として保存をすると、その前提条件がかなり難しいことがありまして、今の財政の厳しい時に龍野市の方も手を出しかねておるとい状況です。さりとてあのまま朽ち果ててしまうのは地域の私たちににとっては非常に残念です

ので、1つ頭痛の種になっております。

それと先ほども国土交通省の方に、このあたりの流下能力について説明いただきましたが、そのグラフからすると、洪水時の流量を満たしていないようです。一番初めのほうのページのグラフで、このへんは河口から13キロぐらいらしいのですが、ちょうど赤線より下になっているところですよ。はっきりしたことを伺ったことはありませんが、ここの川幅を広げなければいけないというご計画がおありと聞いております。そうなりといずれあそこを削れなければ仕方がなくなります。こっちを削るか、向こうを削るかとなりますと、向こうの方は、削るとなると大変でしょうから、やはりこっちということになります。そうすると、幼い時から馴染んだあの美しい景色が消えてしまうことになり、とても悲しい気持ちになるわけでございます。それが堀家やこのあたりのことでございます。

それから資料に、お水に関するものを付けております。私は実は醤油屋でございます、今は資料館の館長をしていますが、揖保川の伏流水の恵みでお醤油を作らせてもらってきたというようなところがあります。それがうすくち醤油です。うすくち醤油を作るのに鉄分が多いお水だと色が薄くならない。なんか難しい分析表なんか付けてますけども、厚生省が言っている難しい名水の基準があります。このごろやたら名水といって水を売ってますから。何でもかんでもイメージで売っては駄目だということで、ああいう基準が設けられています。その基準の2分の1以下ぐらいの鉄分しかないというのがきれいな色の薄いお醤油を作る非常に大きな要素になっております。そういったようなことでこの資料を付けさせていただきます。

それから、もうひとつございまして、この下流に見えてます橋、今は龍野橋と言います。ああいう鉄筋の橋に架け代わる前、木橋の間は楠津橋と言われました。対岸のあそこにクスノキが見えてます。あれそのものではないのですが、ちょうどあのあたりに昔からやはり大きなクスノキがありまして、楠津の渡しと言われていたようです。その渡しが明治になって橋が架かって楠津橋と言われるようになったそうです。なんでも聞くところによると、揖保川は幕府が西国大名に対する防衛線と考えて、やたら橋を架けるのを禁じていて、この龍野にも対岸との交流には専ら渡しが使われて非常に便利が悪かった。そういうことを聞いております。

それから、さきほどの浅見委員の説明をテープで聞かせていただきましたが、その説明の中に、三木露風が歌の中でお醤油の樽を洗うを詠んでいるというご説明でしたが、あれは実は、麻の袋を乾かせるという文句なんです。麻の袋というのは醤油を絞った麻袋のことなんです。昔はここへ袋を洗いに蔵人が来ていました。浅見委員がおっしゃったように昔はこんなに草が生えていません、石がゴロゴロしてましたから、その上に洗った袋をずっと並べて袋を干していました。

前のほうで樽のことにも触れているところがありますが、干していたのは樽ではなくて麻の絞り袋のことです。